

# Y 2008 No.41



これは世につたえておきたい  
かたっておきたい  
わが胸の底から真実のおもい  
人生幾山河のめぐりあい  
あの日の風やひかり そして空のひとひら  
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路  
「自分史図書館」は その証言館です。



私の読書鉞脈発掘術 その1

椎 窓 猛

去る4月8日、いずれの新聞も、作家小川国夫氏の死去を報じている。新聞によってその見出しは異なるが、共通するのは代表作として「アポロンの島」をあげていることだ。

この作品が島尾敏雄氏の絶賛によって作家として世に迎えられたことによると思われる。

寡作な作家で広くは知られなかったが、ある確実な読者層があった。私もこの作家には注目し、交誼も得た。一時期、私の作品にもていねいに批評の書簡もいたゞいた。毎年、ユニークな手づくりの年賀状も貰っている。これは大切に保存している。小川さんの最後のエッセー集「夕波帖」をとりだし追悼の思いでひもといていると、「よみがえる天草」と題された旅の思い出が書かれている。それに熊本の作家平川虎信の娘さんと出会った話があり、この作家の遺作「手紙」も併せて読み返すことになる。  
(自分史図書館長)



○大伴部博麻物語

木 下 義 弘

この本の序に、野田八女市長はつぎのように記されている。

——大伴部博麻の功績を広く国民に知っていただくことが、今日失われつつある日本の道徳教育の再興につながるのではないかと思い、読みやすい絵本として刊行することになりました。——

著者の木下義弘さんは、おのれの身を売り奴隷となって仲間を日本へ帰した博麻の国をおもう偉大さを、その事蹟を紹介、郷土愛を培かう糧にしたかったと発刊にあたり語られている。

むすびに、桜の花びらが北川内川の岩場に散りそめる頃、博麻がもう二度と着ることもないであろうと、手ごろの石を軍服に包み、岩場の上から、川の淵に沈める場面にはいい知れぬ感動に包まれる。

また遺業を讃え、石に刻書、北川内公園に碑が建立される讃仰の行為も伝承されなければと読みながらの感想である。

## 受贈図書紹介 ㊟

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。  
あしからずご了承下さい。

僕と猿 …………… 久津 晃 福岡市  
肥前の新しい歌枕 …… 白鷺短歌会・潮鳴り短歌会 武雄市  
歌集やぶれがさ・多多良 …… 山埜井喜美枝 福岡市  
プラトニックラブ灰色の中の青春 …… 江頭 静枝 筑紫郡

句集あさくら …………… 古賀 幹人 熊本市  
肥前街道榎津小保と吉原家の創建… 石橋 泰助 大川市  
遥かなる祖国への道 …………… 小出 盛夫 愛知県  
軍隊生活の想い出日記 …………… 志賀 正司  
丸腰整備兵 …………… 杉田 裕巳 東京都  
生と死の狭間を生きて …………… 増澤 昭子 岡谷市



○非常時に育った俺たち  
中島 傳

戦争で一生懸命言われるまま命令されるまま戦った兵士に何の罪があるのか？  
13歳、非常時に育ち航空隊を志し、大刀洗の陸軍飛行学校入学。その後、南方戦線転々。昭和19年、わが軍も絶望的な状況、食糧も乏しくなり、ヤシの実採りに木に登ったところ転落3日間意識不明、それでも息を吹き返し「運の強いやつ」と兵隊仲間が呆れていたといった話などもあるが、復員後警官志望、後に食糧販売店経営。私の人生は常に何か大きな力に護られ、生き抜いてこれたと、大正14年生まれの中島さんは回顧されている。



○俺の海軍時代と戦後  
矢崎高徳

矢崎さんは大正15年出生。父は鉄道員、母は男ばかり5人の子育て。薄給の父の収入をやりくりしながら家庭を支えてきた母の姿。矢崎さんは三男坊。昭和18年5月。横須賀海兵団へ入団。伊号157潜水艦初乗艦潜航体験。その後空襲により負傷。やがて終戦。闇屋体験、農家へ米の買いつけ。サツマ芋など三切れ十円で、四方八方から手がでて一時間たらずで売り切れたとか。  
昭和30年、友人の紹介で日野市の自動車会社に入社。77歳の年に退職。結婚は昭和27年、一男三女の子供に恵まれるが、ひ孫の顔を見るにつけ、よくぞここまで生き長らえたとしみじみ妻と語りあう日の昨今。実直に自分史をつづられている。



○底鳴る潮 青木繁の生涯  
渡辺 洋

青木繁という明治の天才的な画家の伝記は少なくない。彼の苛烈な生涯がドラマを呼ぶのである。この渡辺さんが描く伝記の特色は、彼の短歌に照明をあてながら描きだされている点で、興味深く読みとられる。  
・わが国は筑紫の国や白日別母  
母います国櫃多き国  
繁の母親の里は八女の旧岡山村室岡。やまたいこく、ひみこという音の響きに繁は幼にして古い時代に関心を呼び、後に画題に影響を与えたのではないかといった考察も示唆に富む。  
・谷道を唄の声して下る馬子箱根八曲り人の影見ぬ  
・ほのぼのとまだ明けやらぬ春の海鷗のゆくへ追ふ夢ごこち  
繁は歌人でもあったのである。



○おれたちの落日  
倉坂葉子

岡山県倉敷に生まれ、岡山師範卒、中学教師のかたわら同人雑誌に拠って作家活動をつづけられたと思われる方の小説集である。4篇のうち「雪崩」は1963年12月号「文学界」に発表とあるからその力量ある作家とうかがわれる。「雪崩」は不良中学生を体罰に及んだ教師の苦悩が描かれている。序文に作者の教師であったと思われる手島靖生教授は、「鋭い批判の奥に、人間に対する本当の愛があるから、それゆえに読者に何かを考えさせるものがある」と懇切な序文を寄せられている。それにしてもどのようないきさつでこの一冊がたどりついたものか、この図書館へ——と思わせる。

編集掌記

いった話を聞く。ある学校では、「与田準一全集」を処分しようとしていた。それをたまにたま見かけた私はもつとも愛読していた『五十一番目のザボン』を貰ってきたが、今にしてみれば全巻頂戴しておけばよかったと後悔している。▼新刊をとり揃えてさえおけば——という感覚では、一年もたてば古本。この古本の価値をどのような視点で選択するかによって特色を持った図書館が出現するのではないか。▼『古本病のかり方』といった奇妙な題の本を出版以来、古本評論家として活躍の岡崎武志さんは、このごろ『ベストセラー』

▼学校の図書扱いで、もうこれは古本ですから廃棄しましょう、書棚が足りませぬので——と

**自分史図書館**

入館無料  
開館 午前9時～午後5時  
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。  
貸し出しはしていません。

〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122  
西鉄バス野町停留所より徒歩5分  
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

だって面白い』といったひとひねりしたような本を出している。すぐに古本化するのがベストセラーという通念があるが、岡崎さんにはそれを時代、世相のバックミラーとしてとらえているところに妙味がある。

(自分史図書館長 椎宏彦)